

岡村 晃子 教授

【おかわら あきこ】

1999年より高崎経済大学で英語を担当。それ以前は、1991年から1999年まで英国ニューカッスル大学で日本語専任講師。2000年にニューカッスル大学より応用言語学で博士号 (Ph.D.) 取得。主な専門分野は学術論文分析、語用論。



- アカデミック イングリッシュI・II
- Practical English1・2
- 言語と社会
- 言語と文化

研究テーマについて

私は経済学部で英語を教えています。経済学部で英語？ 何を研究しているのだと思うられるかもしれません。

私は、社会の中で言葉はどのように使われているのか？ 聞き手、読み手に分かってもらい、よりよい人間関係を作るために私たちはどのように言葉を使っているのか？ ということ調べています。一見漠然としてつかみどころのないテーマのようですが、実は身近に話題はあります。

例えば、友達にメールを送るとき、先生にメールを送るとき、たとえ同じ内容でも微妙に話のもっていき方が違うかもしれません。また話の内容によって、いつもの書き方と変えることがあるかと思えます。友達の中でも“ちゃん”付けで呼ぶ人と、呼び捨て、苗字を使う人など結構呼び方でも違いがあるかもしれません。それはどうしてでしょうか？ 私たちは案外意識をしないレベルでも、いろいろと言葉を選んで使っているのかもしれないのです。文法的には正しくても使わない表現もあると思います。ということは、言葉って文法以外の要因も大きく作用しているということですね。

私の研究は、このような言葉の使い方に隠れたルール、使い方のパターンを調べ、社会の中で私たちがどのように言葉を使っているか、効果的な使い方とはどんなものなのかを調べています。

言葉は辞書の中に存在するものではなく、それを使う人間が新しい意味を作っていくものです。英語を使う人間の数は、英語を母語としない人々の方がずっと多くなっています。ということは、英語を変えるのは私たちなのです。そう思うと少し気が楽になりませんか？

担当する科目

2010年度はPractical English 1/2、Academic English 1/2、言語と社会、言語と文化

Practical English は英語を話す力を伸ばすことを目的としています。会社でプレゼンテーションの際に使える英語を学生が習得できることを大きな目的としています。

Academic English, 言語と社会、言語と文化は選択科目で、言葉が社会の中、大学の授業で英語がどのように使われているか紹介しています。

私たちはどのように言葉をつかっているか？